

保名 (深山桜及兼樹振)

云つわやい

いなさぬ

アレ あれを今宮の

口舌さへ

采山翁が筆ずさみ

月夜烏にだまされて

恋よ恋

土人形のいる娘

いつそ流して居続けは

われ中空になすな恋

高根の花や折る事も

日の出る迄もそれなりに

恋風が来ては袂にかいもつれ

泣いた顔せず

寝やうとすれど

思ふ中をば吹きわくる

腹立てず

寝られねば

花に嵐の狂ひてし

りんきもせねばおとなしう

寝ぬを恨みの旅の空

心そゞろにいつくとも

アラうつゝなの

よさの泊りはどこが泊りぞ

道ゆく人に事問へど

妹背中

草を敷寝のひぢ枕

岩せく水とわが胸と

主は忘れて

独り明かすぞ悲しけれ

碎けて落つる涙には

ござんしょう

はごしの幕の内

かたしく袖の片思ひ

しかも去年の桜時

昔恋しき面影や

姿もいつか乱れ髪

植えて初日の初会から

移り香や

誰が取上げていふ事も

逢つての後は一日も

その面影に露ばかり

菜種の畑に狂ふ蝶

便りきかねば気も済まず

似た人あらば教へてと

翼交はしてうらやまし

うつらと夜を明かし

振りの小袖を身に添えて

野辺のかげろう春草を

ひるぬ程に思ひつめ

狂い乱れて伏し沈む。

素袍袴にふみしだき

たまに逢う夜の嬉しさに

狂い来て来たりける

酒ことやめて語る夜は

「なんじゃ恋人がそこえいた

いつよりも

どれ

つい明け易く

エゝまたつそいつかわつけないこと

いのう